『腹京師食物合戦』成立考

――『三升増鱗祖』との比較から――

吉田慎一朗

［キーワード　①黄表紙　②恋川春町　③登場人物　④安永五年］

はじめに

安永八年（一七七九）刊行の黄表紙『腹京師食物合戦（はらのみやこしよくもつかつせん）』は、画工・作者の問題や、制作年・刊行年の問題など、その成立をめぐって未だ解明されていない点の多く残る作品である。その粗筋は以下の通りである。

蛇塚蛇五右衛門という悪食の大男が、食い合わせの悪い食物を食べる。腹の中に入ったほうれん草姫は、腹の主のみの前（美濃米）に会い、みの前はこの姫を我が子とする。姫は松魚初之助と恋仲になるが、切餅が姫に横恋慕し、二人をやっかんで恨みを晴らそうとする。みの前が病み、切餅が貸した金子三百両を呑んだところ治癒するが、金を返すことができない。切餅は金の代わりにほうれん草姫を連れていこうとするが、姫の傳・香物大根左衛門が駆け付け、吉日に改めて姫を進上すると言って切餅を帰し、姫には松魚と婚礼を挙げさせる。これを知って激怒した切餅は薩摩芋、西瓜、鰻等と共に、みの前の立て籠もるはとむねの城に押し寄せる。城中には、反魂丹、和中散、鮑などが集まって応戦する。一方蛇五右衛門は腹中の戦の痛みに堪えかね、針医を呼んで解毒の丸薬を呑む。切餅たちはみの前たちにあらかた退治されるが、依然手下の毒が残っているところへ、解毒の丸薬が現れて五臓六腑を駆け回り、食毒たちは肛門谷へ落ちていく。

今回、本作について恋川春町画作『三升増鱗祖（ますますうろこのはじめ）』との比較・検討を行ったところ、これら二作の間に登場人物の配役や話の展開に複数の共通点・相違点を見出すことができた。本論では、先行研究を整理した上で、これら二作の比較から、『腹京師食物合戦』が恋川春町画作である可能性や、『三升増鱗祖』と同時期に制作された可能性について検討してみる。

なお、本論において、『腹京師食物合戦』『三升増鱗祖』の絵は国立国会図書館本を使用する。また翻刻は、前者は中村正明

氏の論文[注1]、後者は松原哲子氏の論文[注2]に載る、国立国会図書館本を底本とする原文表記の翻刻に基づき、それを適宜私に改訂しながら引用する。

一、先行研究から見えてくる問題点

中村正明氏によれば、本作は複数の年表において「恋川春町画」であるとされるが、「春町作であるかは決め手に欠く」[注3]としており、加えて次のように述べている。

本書は、同年に鱗形屋から版行された『妖怪仕内評判記』『甚三紅絹由来』とともに作中の作者・画工署名が削られた作品として知られている。本作の削除の方法も、各巻最終丁に署名の枠を残したまま、名前のみ削るという粗雑ともいうべきやり方である。

実際、『日本小説書目年表』[注4]の安永八己亥年出版の項を見ると、本作と『妖怪仕内評判記』『甚三紅絹由来』の無署名の黄表紙三作品の名が、恋川春町の作として記載されている。

森銑三氏もまた、本作を春町作と見なしてはおらず、『黄表紙解題』[注5]において次のように言及している。

『小説年表』などに、これを春町の畫作と極めてしまつてゐるのなど、もとより従われぬ。春町の作品の持つ警抜なものなどは、この作にはない。ほうれん草姫などはかはいいが、その姫が後には出なくなつてしまふし、松魚にしても、十分に活躍しないで終つてしまふ。對話にも、春町の作品に見るやうな洒落がない。

その一方、宮永啓子氏は、『腹京師食物合戦』が『三升増鱗祖』や春町の他作品と絵・内容共に多くの類似点を持つことを指摘し、春町画作説を推している[注6]。

恋川春町画作『三升増鱗祖』は、安永六年に鱗形屋から刊行された黄表紙である。版元である鱗形屋と、隣家の艾屋である三升屋という、実在する二店の宣伝を全丁にわたって行った点で極めて奇抜な作品とされ、また、両店の商品である絵草紙と艾が擬人化され異類合戦を繰り広げるという展開の新規性が評価の対象となっている。安永期鱗形屋の経営状況は低迷していたと思われ、重板事件を起こしていることなどから、その信頼回復策という意味でも、このような宣伝黄表紙が制作されたのではないかと考えられる。

以下、宮永氏の指摘を簡単に整理すると、次のようになる。

《絵》

・ほうれん草姫・松魚初之介の顔の描き方に春町の特徴がある。
・切餅方と美濃米方の戦いの場面が『三升増鱗祖』の切艾方と草双紙方の戦いの場面における兵士達の姿や構図と酷似している。

《内容》

・蛇五右衛門の腹の中を舞台として食い合わせの食物を登場させ擬人化した趣向が、春町画作『うどん／そば　化物大江山』（安永五年刊）と通ずる。

・ほうれん草姫と松魚の恋愛の場は、その趣向、見染の場で引例する役者の名まで『三升増鱗祖』と同じである。

・春町の他作品に使用例のある遊女の名や謡曲通小町の詞章が引かれている。

・後半の中心である切餅方と美濃米方の戦の場面は絵だけでなく、着想・趣向の立て方も『三升増鱗祖』に酷似している。

二作の間に、具体的にどのような表現の類似が見られるかということについては後述する。宮永氏は『妖怪仕内評判記』にも『三升増鱗祖』との類似性が見られることを指摘しているが、本論では便宜上取り上げないこととし、ここでは、『腹京師食物合戦』の制作・刊行に至る過程についての氏の見解を紹介するにとどめておく。

特にこの作品は三升増鱗祖とよく似た手法が随所に用いられ、それも他人が模倣した風のものではなく、むしろ春町自身が板元に懇請されたか何かで、ゆっくり趣向を考える時間もなく、今までに自分が使ったことのある、ありあわせの素材で、構想などに特別な苦心を払いもせず書き上げたものでこれも独創性が乏しい故に署名を控えたかと思われる。

鱗形屋が安永九年から三年間にわたり草双紙出版を休止し、その後復活するも程なくして店を畳んでいることを考えると、安永七・八年の鱗形屋の経営状態はそれ以前にもまして危ういものだったことが想像される。宮永氏の言うように、安永七年頃の鱗形屋が春町に泣きつき、緊急措置として制作されたのが『腹京師食物合戦』であるとする見方は、一応筋が通っているように思われる。

しかし、松田高行氏はこれと異なる見解を示している。松田氏曰く、先に挙げた無署名の黄表紙三作品が、実は安永四～六年の旧作だったと仮定すれば、その表現の稚拙さや作品の完成度を鑑みても、恋川春町の自画作であることが認められるというのである。そして氏は、それら三作品が安永五年成稿、翌六年出版予定のものであったとするならば、同時期に春町が朋誠堂喜三二作品の挿絵を多く手掛けていたことから、喜三二の影響を受けて自作の至らなさを痛感し、出版を見送ったのではないか、と述べている。[注7]

更に同氏は、三作品が安永八年に出版された背景として、安永七年に『三幅対紫曾我』が筆禍を蒙ったことを受け、この作品に対応する内容として作られた『染直鳶色曾我』の出版を春町が見送るよう鱗形屋に依頼した可能性にも言及している。しかし、鱗形屋としては売れっ子である春町の作品を出さないわけにはいかず、やむを得ず当時未刊行の三作品を持ち出した

のではないか、と推測している。

草双紙の制作は、翌年正月の刊行を目指して前年の秋頃から始められたと考えられる。『三升増鱗祖』は安永六年刊行のため、安永五年に制作されたと推定できる。したがって、松田氏の仮説が正しいとすると、『腹京師食物合戦』と『三升増鱗祖』はほぼ同時期に制作された可能性が出てくる。一見珍奇な説だが、『腹京師食物合戦』における人物の描き方に着目すると、検討する余地のあることに気付かされる。

時田真理氏は、春町の前・後期における画風比較を、顔や全身、画面構成の三つの観点から行っており、[注8]その中で、春町が描く人物の立ち姿の等身を測定し、その結果を次のような表にまとめている（図1）。

時田氏によれば、「初期には七等身に近かったものが次第に六等身になり、後期にいたっては五等身に近づいている」。安永八年に刊行された春町作品のうち、『腹京師食物合戦』に描かれた男は七・一等身で描かれているが、この数値は同年刊行の他作品に描かれる男の等身と大きく差が開いており、寧ろ安永七年以前の刊行作品に見られる数値に近いことがわかる。

更にもう一つ、時田氏は前・後期で顔の描き方が「男女とも顎の尖りがなくなって、四角張った大顔へと変化している」と述べているが、前期の男の顔の描き方を見ても、その微妙な変化に気付く。安永六年刊行の『三升増鱗祖』二丁表の永持道意をはじめとして、『親敵討腹鞁（おやのかたきうてやはらつづみ）』『月星千葉功（つきとほしちばのいさおし）』などには、横に長く扁平気味で、白目があり、顎のしゃくれた顔が描かれているのに対し、安永八年刊行のものを見ると、「四角張った大顔」に線状の目と通った鼻筋が描かれているようである。そして、『腹京師食物合戦』に見られる男の顔は、安永八年刊行のものよりも寧ろ六年刊行のものに近いのである。

このようにして見てくると、『腹京師食物合戦』が安永八年刊行に合わせて制作されたとはますます考えづらくなり、『三升増鱗祖』と同時期にあたる安永四～六年に制作されたのでは

作品名	等身 男	等身 女
(安永4)		
金々先生栄華夢	6・2	7・0
(安永5)		
唐倭画伝鑑	6・2	7・0
高慢斎行脚日記	7・2	6・7
其返報怪談		
化物大江山		
(安永6)		
三升増鱗祖	7・1	7・0
親敵討腹鞁	6・8	7・0
女嫌変豆男	6・6	
月星千葉功	3・6	7・0
南陀羅法師柿種	5・8	
鼻峰高慢男	7・0	8・1
花見婦鳴呼怪哉	6・6	7・1
珍獣立曽我	6・4	7・0
桃太郎後日噺	6・3	
(安永7)		
芋太郎屁日記咄	6・0	
辞闘戦新根	5・6	
三幅対紫曽我	7・0	7・0
間違曲輪遊	6・4	6・7
蛭子大黒壮年過	6・1	6・8
(安永8)		
妖怪仕内評判記	6・5	
旭縁起那須野佛	5・8	6・1
案内手本通人蔵	5・3	
今昔曽我面	5・0	5・6
基三紅絹由来	5・7	6・5
腹京師食物合戦	7・1	6・7
(安永9)		
金銀先生再寝夢	5・6	5・6
(天明1)		
無益委記	5・6	5・5
(天明2)		
雛形意気真顔	5・5	5・8
我頼人正直	5・2	5・7
染直鳶色曽我	5・3	
(天明3)		
悪抜正直曽我	5・8	6・8
金山寺大黒伝記	5・5	5・8
郭寓貴字尽	5・3	5・2
猿蟹遠昔噺	5・8	5・4
節季夜行		
宝船福正夢	5・3	
通言神代巻	5・2	6・6
亀屋万年浦島栄	5・6	6・1
吝坊吝寝取	5・7	
長生見度記	5・3	6・2
変名用文章	5・6	6・2
(天明4)		
吉備能日本知恵	5・3	5・6
其昔竜神噂	6・4	6・8
万歳集著徴来歴	5・6	
吉原大通会	5・6	5・2
(天明8)		
鎌倉太平序	5・5	

図1　時田真理氏「『南陀羅法師柿種』について」より

ないかという松田説が有力さを増してくる。このことは、宮永氏が指摘する通り、この二作が多くの点で類似性を持つことと無関係ではないように思われる。そこで次項では、二作の共通点・相違点を整理することから、松田説の妥当性を検証し、『腹京師食物合戦』の成立年に関する新たな考察を試みる。

二、『三升増鱗祖』との比較

ではまず、『腹京師食物合戦』と『三升増鱗祖』の共通点と相違点について、先に箇条書きで列挙した宮永氏の指摘を検討することから始める。

氏の言う通り、『腹京師食物合戦』におけるほうれん草姫と松魚初之介の見染の場、切餅方と美濃米方の合戦の風景は、それぞれ『三升増鱗祖』における頼朝と政子の見染の場、艾の精と草双紙の精の合戦風景と酷似している。

見染の場から分析していこう。『腹京師食物合戦』三丁裏・四丁表の挿絵（図2）と『三升増鱗祖』四丁裏・五丁表（図3）を並べてみると、構図からしてその近似していることは一目瞭然である。

前者では、右側におふぐとほうれん草姫が、左側に松魚初之介が描かれているのに対し、後者ではこの構図を鏡に写し取ったように、左側に腰元せきやと政子姫、右側に頼朝が描かれている。初之介・頼朝が女たちを振り返っており、ほうれん草姫・政子姫はそれぞれ腰元おふぐ・せきやの背中に隠れるようにして立っているというように、人物の配置までそっくりである。

図2　『腹京師食物合戦』3ウ・4オ

図３　『三升増鱗祖』４ウ・５オ

更に、初之介を見たほうれん草姫が「へこれ、おふぐ、あの殿御はお名は何というぞ。どうぞきゝましてたもれ。とんと市川門之助といふ役者そのまゝ。ヲゝしんき」と言うのに対し、頼朝を見た政子姫は「市川門之介が舞台顔に生きうつしさ」と、どちらの姫君も見染めた男を当時人気の歌舞伎役者・二代目市川門之助に喩えている点でも共通している。

一方、腰元女中の顔を見ると、おふぐは醜女として、せきやは美人として描かれている点が異なる。そしてこの腰元の描き方が、切餅・新五左衛門の立ち位置にも作用している。則ち、『腹京師食物合戦』では、切餅が画面左端に描かれ、「へアノ娘ハ美しい。かたはらにいるやつハわれらきつい」とほうれん草姫に横恋慕している。これに対し、『三升増鱗祖』では、姫君の付家老であるいけすか新五左衛門が頼朝と政子姫・せきやの間に割って入り、「せきやぼう何をきよろ〳〵見るのだ。あの若衆を見るまで、をれが顔を見る気はないか」と政子姫ではなく腰元せきやに言い寄っているのである。

この差異は、二作の制作目的の差異を表していると考えられる。『腹京師食物合戦』では初めから純粋に合戦を描くことを目的としていたために、切餅方と美濃米の対立の原因がほうれん草姫の処遇を巡る問題にあるとすることが可能だったのだろう。一方、『三升増鱗祖』は、版元である鱗形屋が隣家の三升屋もろとも宣伝を行うことを第一の目的としていた。そのため、政子姫をめぐって頼朝と新五左衛門が対立する様子を描いたところで仕方なく、それよりも政子姫の治癒に鱗形屋と三升屋の

商売物が役に立つという展開のほうにこそ焦点を当てる必要があったのではないか。事実、その後の展開を見ると、九丁裏・十丁表で、頼朝の密通を咎めに来た新五左衛門を腰元せきやが誘惑し、油断したところを頼朝が灸箸で打ち据えて、簡単に厄介払いを済ませている。この場面で、頼朝が新五左衛門を懲らしめることについて、地の文において「物を決めることを釘をさす、灸を据えるといふ事、此時よりぞ初りける」とこじつけていることを考えると、新五左衛門という人物には、三升屋の商売物である艾に擬えて「灸を据える」という言葉遊びを成立させる役割があったと言える。

ここで、『腹京師食物合戦』が『三升増鱗祖』に先行して制作されたと仮定してみると、前者の人物関係を更に発展させたものが後者のそれであると言えるのではないだろうか。つまり、互いを見染める男女の構図はそのままに、腰元女中と邪な恋心を抱く男の役どころを、それぞれ醜女から美女へ、男の恋愛対象を姫君から美しい腰元へ、と若干複雑化させているのである。『三升増鱗祖』ではこのように、『腹京師食物合戦』の登場人物に適宜改変が加えられることによって、鱗形屋・三升屋の宣伝に役立てられていると考えられる。

加えて、『腹京師食物合戦』に登場する腰元おふぐについて、安永六年（一七七七）に刊行された朋誠堂喜三二作の黄表紙『桃太郎五日噺（ももたろうごにちばなし）』に登場する醜い下女「おふく」と、名前や描かれ方が似ている点は注目に値する。ここに春町と喜三二の影響関係があるとするならば、『腹京師食物合戦』とこの作品の制作時期はそう離れてはいないのではないか。『桃太郎五日噺』において春町は画工を務めており、その制作時期は刊行前年の安永五年秋頃であったはずだ。そして『三升増鱗祖』もまた、この時期に制作されている。つまり、三作が同時期に制作された可能性が考えられるのである。

次に、二作における異類合戦の場面を見ていく。宮永氏は、合戦場面の構図や人物の描き方、趣向に着目しているが、私はむしろ、典拠に類似点が見られると考えている。

『三升増鱗祖』十三丁裏・十四丁表において、草双紙の精は艾の精に対し劣勢に描かれ、次の十四丁裏・十五丁表で「楠流のはかりこと」を用い反撃することで巻き返している。こうした表現は、『太平記』巻第三「赤坂の城軍の事」及び巻第七「千剣破の城軍の事」において城攻めを受ける楠木正成の姿を典拠としている。

これに対し、『腹京師食物合戦』九丁裏・十丁表の合戦風景の場合はどうか。以下に絵（図4）と本文を挙げる。

切餅は腰元ふぐにてあざむかるゝのミならず、ほうれん草のかたへ、はや婿入もすみたるよし。無念骨髄に徹し、この恨ミをさんぜんと食い合せの食物の悪者薩摩芋、西瓜、鰻、別してほうれん草がきらいのお歯黒などを引率して、背骨峠を打ち越へ、腱、膝の難所をしのぎ、ミの米が立てこもるはとむねの城のふう門までこそ押し寄せける。

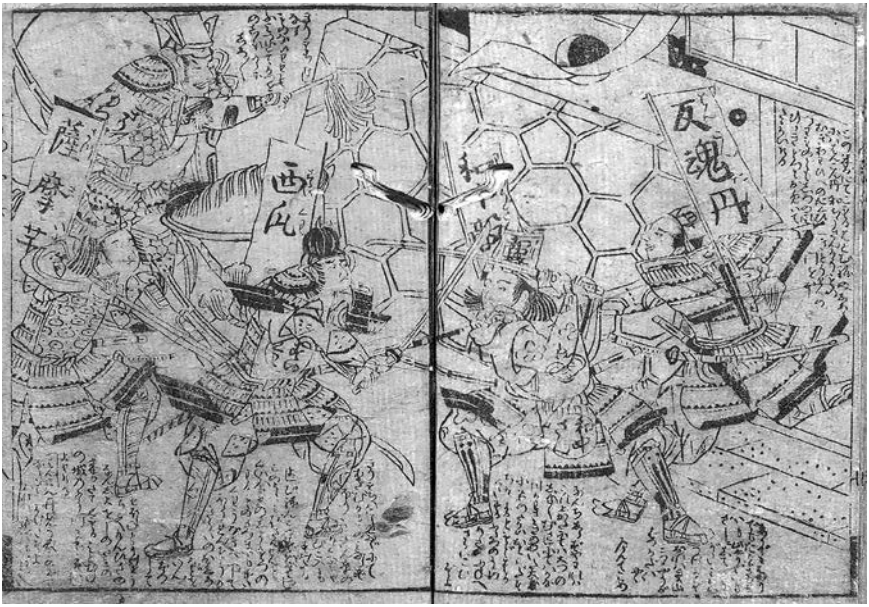

図４　『腹京師食物合戦』９ウ・10オ

腹の主である美濃米のもとに、切餅率いる食い合わせの悪い食物の軍勢が攻め込んでくるという展開は、『三升増鱗祖』における合戦の概要と似ている。則ち、幕府軍に城を囲まれ、窮地に追い込まれた楠木正成が、奇策や神仏の加護によって危機を脱するという『太平記』への意識が、本作にも活きていると言えるのではないか。

更にこの後、腹痛を訴える蛇五右衛門は針医ちく市から丸薬を貰い、その効能によって、「あらゆる食毒一度にどつとはとむねの城の下なる肛門谷になだれおちて」いくという結末になっているのだが、これも、『太平記』巻第七「千剣破の城軍の事」で、楠木の奇策によって長橋ごと谷底に燃え落ちた幕府軍側の兵士たちの最後をパロディ化したものではないだろうか。

この結末においてもまた、二作の発想は似ている。『三升増鱗祖』では最終的に池洲稲荷が現れて戦を平定するのに対し、『腹京師食物合戦』では丸薬が腹の中に残った毒を一掃する。どちらも、勝敗が完全に決する前に両軍を凌駕する強大な力が働き結末を迎える、という点において共通する。尤も、厳密に言えば本作の場合、丸薬が効能を示す前から美濃米側が形勢逆転している点が異なる。『三升増鱗祖』では宣伝のために三升屋の顔を立てなければならなかった手前、対立する両店の勝敗をつけることが出来なかったのだろう。

いずれにしても、二作品のどちらも、合戦は両軍が対等な状況から始まるのではなく、どちらかといえば劣勢にある側（草双紙の精、美濃米方）の軍勢が、優勢な側（艾の精、切餅）か

ら攻撃を受け、それに反撃するという展開になっていると指摘できる。

ここまで、宮永氏の論に導かれつつ、『三升増鱗祖』と『腹京師食物合戦』における見染の場と合戦場面の比較・分析をさらに行ってきた。そうした分析からわかってきたことは、これら二作では、場面そのものの類似だけではなく、主要な登場人物たちの役どころや関係性が、かなりの確率で重なってくるということである。

二作に似た役で登場する人物を、次のように表にまとめてみた。

『腹京師食物合戦』	『三升増鱗祖』	役　割
ほうれん草姫	政子姫	事件の渦中にいる姫君
松魚初之介	頼朝公	市川門之助そっくりの美男
美濃米	時政	姫の父親
切餅	いけすか新五左衛門	狡賢く野暮な男
腰元おふぐ	腰元せきや	知恵を巡らせ姫を守る
香物（傳）	鱗形屋孫兵衛／三升屋平右衛門	見染め合う男女を助ける男
針医ちく市	くだす流庵	医者
解毒丸	池洲稲荷	戦の平定・仲裁

従来、『腹京師食物合戦』は、無署名であるが故に作者が春町かどうかは決め手に欠くとされてきた。しかしこうして見ると、二作の主要な登場人物の役割がことごとく対応しており、同一人物による作ではないかとする宮永氏の説が一層説得力を増してくる。

更にここで、前述したように、腰元おふぐとせきや、切餅といけすか新五左衛門のように、登場人物の中には、共通点と相違点を併せ持つ者が存在する点に留意したい。それは、松田氏の説に従って、これら二作が安永五年頃に春町の手によって制作されたとする場合、どちらかが先に成立し、後にもう一つを制作する時に、前作の構想や人物造型を引き継ぎながらも、前作の改善の余地や宣伝等の出版事情を踏まえて、新たに修正が加えられたことを意味するからである。

ここでまとめておきたい。すなわち、二作の成立の経緯としては、まず合戦を描くことを目的とする『腹京師食物合戦』が春町によって制作されたと考えられる。次に、版元鱗形屋から宣伝黄表紙の制作を依頼された春町は、あまり悠長に構想を練る暇もない中で、『腹京師食物合戦』を焼き直し再利用できないかと考えついた。そこで、切餅や腰元おふぐといった人物に宣伝材料の役目を背負わせ、いけすか新五左衛門と腰元せきやという新たな登場人物に仕立て上げるのに伴い、自然話の筋も複雑化する。こうして出来上がったのが『三升増鱗祖』だった、という推測が成り立つのではないだろうか。更に、これらがすべて安永五年秋頃の出来事であったとするならば、『腹京師食物合戦』の署名が削られていたのは、内容に類似のある作品を

同年に刊行することを控えたためではないか。

これまで、安永五年に制作された春町の自画作は『三升増鱗祖』のみと考えられていたが、ここに『腹京師食物合戦』が加わったとすると、安永五、六年頃の春町は、その作風に総じて未熟な点が多く残り、異類合戦や薬の擬人化といった趣向に拘って試行錯誤を繰り返していたのかもしれない。

和田博通氏は、安永七年の春町について次のように述べている。[注9]

> 安永七年刊の春町の諸作には、当世のうがちが一般的なものから個別的なものに移り、或いはそれを全く行わなくなるにつれて、当世批判などの一切の自己主張を放棄して、構想の奇抜さによる純粋の滑稽性のみを追求するようになるという、共通の傾向を指摘することができる。それは直接的には前年の喜三二の黄表紙に触発された結果だろうが、春町が草双紙の創作を通じて当世に慣れ親しむようになったということが考えられる。

安永六年に刊行された喜三二の黄表紙六作品において、春町は画工を務めている。前年秋頃からその制作を進めていたとすれば、安永五年の段階で、既に春町自身の創作意識に喜三二の影響が及んでいた可能性は高い。『腹京師食物合戦』がちょうどこの時期に制作されたとすると、森銑三氏が指摘するように、「春町作品の持つ警抜なものなどは、この作にはない」のは、春町が「構想の奇抜さによる純粋の滑稽性」の模索をしていた時期だったからではないだろうか。

おわりに

安永八年刊行の黄表紙『腹京師食物合戦』について、『日本小説書目年表』等では本作を恋川春町作とする一方、森銑三氏はこれを春町作とは見なしておらず、本作の画工・作者と制作時期には未だ議論の余地が残されている。本論では、安永六年に刊行された恋川春町画作『三升増鱗祖』との比較という観点から、この問題について検討を行ってきた。

宮永啓子氏は、安永六年刊行の『三升増鱗祖』と本作とが絵・内容に多くの類似点を持つことから、『腹京師食物合戦』が春町作であるとする説に賛同する立場をとっている。この指摘に導かれつつ、本論では『腹京師食物合戦』と『三升増鱗祖』についてさらに詳しい比較を行った。その結果、二作の主要登場人物の造型や役どころが極めて近似しているという発見があった。一方で、似たような役どころでありながら明確な相違点をも併せ持つ登場人物がいることについては、二作の間でその黄表紙の目的に応じて改変が加えられたと考えられ、『腹京師食物合戦』から『三升増鱗祖』へ、筋が複雑化する中で必要な過程だったのだろうと考えられる。

松田高行氏は、『腹京師食物合戦』が安永四～六年に制作されたと仮定すれば、本作の未熟さにも納得がいき、春町作であることが認められると述べ、そのことには妥当性があろう。そ

の上でさらに、本作は安永五年頃制作されたと思われる『三升増鱗祖』とほぼ同時期に制作されたと考えられ、先に指摘したように二作に影響関係があったとしてもおかしくはないと考えてみたい。

以上により、『腹京師食物合戦』は、『三升増鱗祖』に先行して成立した恋川春町画作の黄表紙の一つである可能性が高い。具体的な経緯としては、安永五年頃に『腹京師食物合戦』が成立し、それから間もなく、版元である鱗形屋からの依頼を受けて、その構想や人物関係を下敷きに制作されたのが『三升増鱗祖』であって、後者が安永六年に刊行され、前者は内容の重複を避けるため一旦お蔵入りとなった後、安永八年正月になって刊行されたのではないか。

参考文献

1　中村正明「『腹京師食物合戦』翻刻と注釈」『安永期黄表紙資料集』中村正明ほか編、國學院大學文学部共同研究報告、二〇一七年

2　松原哲子「『三升増鱗祖』について（一）」『実践国文学』第七七号、二〇一〇年

3　1と同様。

4　山崎麓編『日本小説書目年表』ゆまに書房、一九七七年

5　森銑三『黄表紙解題』中央公論社、一九七九年

6　宮永啓子「恋川春町の黄表紙に於ける書誌学上の問題」『国文』お茶の水女子大学国語国文学会第十三、一九六〇年七月

7　松田高行「恋川春町の創作意識」『帝京平成大学紀要』第九巻一号、一九九七年

8　時田真理「『南陀羅法師柿種』について」『叢：近世文学演習ノート』第十四、東京学芸大学、一九九一年八月

9　和田博通「安永期の恋川春町」『芸能と文学：井浦芳信博士華甲記念論文集』笠間書院、一九七七年

画像

・国立国会図書館デジタルコレクション『腹京師食物合戦』（207-39）→https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/9892445/1

・国立国会図書館デジタルコレクション『三升増鱗祖』（199-431）

→上：https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1192658/1

中：https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1192662/1

下：https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1192663/1

（よしだ・しんいちろう　博士前期課程一年）